

第34回 人と海のフォトコンテスト 「マリナーズ・アイ」展 総評

審査員 小松健一

年々異常気象はひどくなる一方だ。今年は本格的な梅雨入りを前に強大な勢力を持った台風が日本列島を襲っている。地球規模となった人類が引き起こしている環境破壊が要因となって海洋の生態系が激変している。異常気象にも当然ながら影響を及ぼしている。

来年、第35回目の節目を迎える「マリナーズ・アイ」展もいよいよ焦点を絞り込んでこの問題に真摯に取り組む時が来たのではないか。それはまた「マリナーズ・アイ」の主旨の中に記されている「古来、豊饒の海、交易の道、文化の道となってきた歴史的海」を守り発展させる唯一の方法ではないかと思っている。

さて、昨年度の第33回展の激減した応募状況を回復させるべき対応を主催者はもちろん僕ら審査にあたる者も現状できるべきことはしたと自負していたが、結果は応募作品数、応募者数とも約3%増であった。

一昨年から実現した横浜会場だけでなく、博多、神戸会場においても全入賞・入選作品を展示すること。そして昨年からは、「作品解説・海の写真道場」も三会場で開催した。十代に光をあて応募者を促進させ、激励・育成するための「U19大賞」の新設。希望者には応募作品返却を復活。ポスター、チラシ等の一新と配布先の拡充などなど努力をしてきた。

しかし残念ながら期待通りとはいかず、微増止まりであった。三年余りにわたり世界中を震撼させた新型コロナウイルス感染がボディブローのように効いてきたのか。はっきりとした要因は不明ではあるが、節目である第35回展に向けてコツコツと地道に精進を積み重ねて行くしか解決の道はないのであろう。応募者のみなさんにもぜひ、もう一回り、二回りの友人、仲間の人たちに声をかけていただき、「マリナーズ・アイ」展へのサポートを心からお願いする次第です。

さて、今年度、第34回展の応募者は972人、応募作品数は3,264作品、応募作品枚数は、3,812枚であった。全体的に見れば約3%の増加ではあったが、いくつか特筆すべきことがあった。

その第一は、初応募者の急増である。今回は全応募者の約60%が初出品だった。ここ10年の初応募者の推移をみても平均約30%前後である。そこから見ると約2倍に増えた。この初めて「マリナーズ・アイ」展に応募した人々をどう捉えるかだ。この人たちが、今まで繰り返し応募をしてくれた強固な約70%前後いたリピーター層に育ってくれるのか。大きな要となるであろう。

第二は、「U19大賞」の創設などの努力もあって十代の応募者、応募作品数が増加していることだ。三年前の第31回展と比較すると約6倍になっている。高校生の応募が多くなってきた昨年の第33回展と比べても1.6倍増えているのである。さらに十代の参加者が増えるように高校の写真部や各種デザイン専門学校などにも積極的にPRしていくことが必要だろう。十代の応募者の中にも一つ大事なことが示されていた。それは女性の応募者の比率である。この三年間を見てもすべて男女とも50%前後だ。これが健全な状態で、他の写真コンテストなどの応募状況を見ても男女半々くらいが多い。にもかかわらず、「マリナーズ・アイ」展の応募者は、男性が極端に多く第32回展では82%、昨年の第33回展でも約82%、今回は、女性が多少増えたもののまだ78%が男性応募者である。ここ15年間みても女性の応募者は20%以下か、多い年でも30%未満なのである。

この問題をクリアできないと応募者数の増加は見込めないと今までにも言ってきたが、十代の応募状況をみて一筋の光を見たような気がした。若い人たちのバランス感覚は至極健全であった。この事はことの他うれしい収穫でもあった。

最後に昨年から恒例となった僕の作品解説「海の写真道場」を横浜会場(7月8日)、博多会場(9月16日)、神戸会場(9月30日)各午後二時(博多のみ一時)よりおこないます。

写真展、(博多は日本の海洋画展と併設)と合わせて誰でも自由無料で参加できます。友人・知人、写真仲間をお誘いの上、ぜひご来場ください。

みなさんと直接お逢い、お話しできることを心待ちにしています。

合掌

2023年 6月1日 写真の日に